

あの日

道 盈

一話 思い出の始まり

ここに、一人のお母さんがいます。お母さんは、久しぶりに部屋の模様替えをしようと思いい立ちました。爽やかな風が、お母さんの頬と髪を撫でた瞬間、お母さんを、そんな気持ちにしてくれるなんて、不思議ですね。

まず、お母さんは、素敵な音楽を聴きながら、充実した一日にしようと思い、埃をかぶった古いカセットレコーダーを出して来てささっと拭き、カセットテープの入った箱の中を、ガチャガチャ探り始めました。何回も引つ越しをしたので、ゆっくり整理することも、聴くゆとりもなく、仕事と家事と子育てに追われてきたお母さんは、思い出さえもが、雑然としていたような気がしました。

今日は、明るいシャンソンかボサノバか、しばらく聴くことがなかった、懐かしいテープを見つけないかと思っていました。その中で、タイトルの書かれていない、古ぼけたテープがありました。はて？ 何が録音されているのか、急に興味が湧いてきて、カセットデッキに入れてみました。

最初、雑音がしばらくあって、突然、小さな男の子の甲高い、キャツ、キャツと弾むような声が聞こえてきました。その声は次に、ガラガラガラッと、うがいをする声に変わり、やああって、「お母さん、お母さん。」とせかさように母親を呼ぶ声に変わりました。そして、「ちよつと待ってね」と食器が擦れ合う音がして、お母さんが、男の子にせかさされながら、ようやく男の子の傍にきたようでした。

テープの音に、聞き入ってしまったお母さんは、いつも座っている、テレビの方に向けた、座り心地の良い椅子に、腰掛け直しもせず、カセットデッキの前に座り込み、もう、ずいぶん前の、若かった自分と、今は遠く離れて暮している、その頃、四歳だった息子との、懐かしい日々を思い出しました。巻き戻されたテープと同じように、巻き戻されて、匂いまで鮮やかに、よみがえってくるようでした。

こんなカセットテープを、箱に入れたことも、録音したことさえも、すっかり忘れていたのですが、懐かしさというより、今の自分にとっては、充分大人になった現在の息子と、このテープの中の男の子、そして若い頃のお母さんは、ドラマの世界の人のように、でもむしろ

ろ、その世界の方が、現実味のある現在のよう思い出されました。

二話 思い出の中で 1

男の子は「お母さん、絵本読んであげる」と言って、次から、次からお母さんに本を読んでもあげています。それは、拙い言葉、作った言葉、耳から入った言葉を音に変えて、口に出しているような、面白い言葉で語られています。文字や文章を読んでいるのではなく、いつも繰り返し読んでもらって、覚えてしまったお話を、懸命にお母さんに語り聞かせている、と言ったふうです。

悪者をやっつける戦士の話から、昔話、中には地方の訛りの、面白いお話を暗記して、スラスラと聞かせているものもあります。次から、次から「お母さん、次、何読んであげようか。次、なんにする？」と続きます。そして、若いお母さんは、時々軽い笑いをたてたり、「へ〜」と感心したり、「それから？ それからどうしたの？」と小さい子がおねだりして聞くような甘え声で、男の子にお話しの続きを、早く、早くと急かしてみせたりしています。男の子は、ますます得意になって、次から次へとお話を続け、とうとうテープは片面が終わり、裏面になってしまいました。それでもまだ続いて、何冊の絵本が読まれたのかも、もうわかりません。

思い出の中で 2

お母さんは、記憶の奥にしまっていたその頃のことを思い出しました。

忙しいばかりで年を重ねたお母さんは、当時のことを、「あの頃は、本当に毎日忙しくて大変だった。若かったから、やってこられた」と、いつも言っていたのですが、テープに録音されたひと時が、その頃の暮らしを少しずつ、明るい映像として、映し出されるように、鮮明に、思い出されました。

その頃のお母さんは、考え方や生き方が合わなかったお父さんと別れて、まだ四歳だった男の子と二人で暮らし、毎日毎日仕事に追われていました。男の子は一歳の頃から保育園に入っていて、両親のいろんな事情で、転居したり、仕事時間と保育園の時間が合わない、などの理由で、もう四回も保育園を変っていました。その後、また別の保育園に変わるので、とにかく、この四回目的の保育園に移って、ようやく落ち着いて通い、お友達も出来ていた頃だと思われました。

いろんな遊び、方言も入ったいろんな会話で言葉も覚えた男の子を、お母さんは、少しずつ赤ちゃんの頃と違うけれど、まだ少年には入らず、半分は赤ちゃんの甘えん坊、半分は自分自分の言い分があると主張のできる少年と言ったふうに、成長の時期を感じ始めていたのです。

一方でお母さんは、仕事への理想と現実の壁や、生活、育児の中で、毎日くたくたに疲れ

ていました。それでも、やりがいのある仕事と社会とのつながりに、生き甲斐や充実感があり、よく働き、よくしゃべり、いつでもどこでも男の子を伴っては出掛け、車で遠出もしていました。今にして思うと、あの気力、体力はどこから湧いていたのか、と思うほど、まるで、何回目かの青春時代のような勢いで。

それとともに、他のお母さん達とはちよつと違って、家庭生活以上に、社会的な活動に目を向けるような生き方をするタイプの人だったのです。そして、お父さんのいない男の子のことや、母子の家庭を、いろいろ詮索されたり、噂の種にされる中で、それに負けないようにすることに、精一杯でした。立派な社会人としての自立などと、自分の胸に誓っているような日々でした。

ですから、ともすると手のかかる時期の男の子を厳しく叱ったり、怒ったりもしました。年を重ねた、今のお母さんは思います。「まだまだ甘えたい時期に、ずい分大人に付き合わせ、無理をさせてかわいそうだったなあ」その頃の周りの大人達は、男の子を「しっかりした子だ」とか、「よく物のわかる子」「お母さんをよく助けているね」と言ってくれたり、「ちよつとかわいそうな気もする」と、控えめに言う人もあったものです。

思い出の中で 3

そんな忙しい毎日を送るお母さんでしたが、男の子がまだ言葉も話さないうちから、ほとんど毎日欠かさず、絵本を読んであげる、と言う習慣を続けていました。絵だけのものには、お母さんの言葉をつけて、会話をする小鳥のように、お話の中の会話のところは、活き活きとした話し言葉と声色を作って。それは、お母さんのお母さんが、お母さんの小さかった頃に、いつつもしてくれた、とつても楽しかったこと、本好きのお母さんにしたきっかけでもあったことでした。

そして、忙しいお母さんが、男の子のそばに居て、静かに一緒に過ごせる、かけがえのない時であり、唯一、男の子にしてやれることと、信じていたからなのです。

また、お母さんは、男の子が小さい時から、テレビで流れる世界のニュースのことを話して聞かせたり、戦争と平和の話や、地球や生き物のことなど、いろいろ話して聞かせていました。

そして、お母さんの仕事も、忙しい生き方も、これらの話につながる思いが、後ろ側にあるのだよ、と伝えたかったのです。その頃のお母さんは、何も知らない子供に、自分の知っていることや思いを、全部伝えていきたい、という気持ちがとても強かったのです。

〜エピソード 1〜

今のお母さんには、テープの中の男の子が、お母さんを何とか楽しませよう、喜ばせようと言う気持ち、あちこちに溢れているのが、よくわかりました。そして、テープの中の

お母さんも、満足そうにしていることがうかがえました。

でもそこで、お母さんはある風景を思い出しました。それはある冬の日のことでした。

その日は、午前中に保育園が終わり、午後は、どうしてもお母さんの仕事が休めず、やむを得ず、仕事場に男の子を連れて行った日のことでした。お母さんの仕事中は、つまらないだろうけど、騒がないで、お利口さんでいてね、とよく言い聞かせましたが、男の子がうなずくのを見届けても、指切りげんまんをしても不安がありました。そんな約束をしても、その場になるとたいがい、お母さんを困らせることが、ほとんどだったからです。あるところまでは、許せても、その日は大事な仕事場でしたから、絶対にぐずったり「帰ろう、帰ろう」と、騒いでほしくないと、お母さんはいつもよりいっそう強く思っ、言い聞かせたのでした。

でもやっぱり、それは無理だったのです。男の子はありとあらゆるお母さんの心配をやつてのけてしまったのです。その上、お母さんに対するいつもの思い、「こうするとお母さんは僕を怒るの」とか、「僕の好きにさせてくれない」といった親子の事情まで、こともあるうに、仕事場の人にぶちまけてしまったのです。お母さんは、日頃、男の子の言った通りのことを痛感していて、男の子にかわいそうな思いをさせていると、哀しく思っていたので、そこは男の子の愛らしい口から、仕事場の顔のある場で、ぶちまけてほしくなかったのですね。若いお母さんは真っ赤に顔を火照らせ、内心も火のように燃えてしまったのです。

↳ エピソード 2

その日の帰り道のこととは、思い出したくない、でも決して忘れられない位に、その後のお母さんを苦しめてしまうことになってしまいました。

仕事が終わっても、お母さんはとても怒っていました。家の近くの枯れた雑木林に挟まれた、いつもの帰り道、歌いながら、おしゃべりしながら、二匹の犬を散歩させ、ウサギのえさの葉っぱを摘みながら歩く楽しい道、その道に差し掛かった時、今日はあの楽しい気持ちでこの道を帰れないと言う情けなさと共に、とうとう怒りが爆発して、「もう、車から降りなさい！ どこへでも行ってしまいなさい！」と怒鳴ってしまいました。怯えた泣き顔になって、「やだー！」と言う男の子を見ると、「ではなんで、あんなふうに約束を破ったの、騒がないと言ったのに、やめなさいと言ったのに、聞かなかつたじゃないの?!」とこみ上げる怒りの治まらない、若いお母さんは、強く、とても強く、男の子の左の頬を、自分の左の掌で、ひっぱたいてしまったのです。

男の子は驚いたのと、恐ろしいのと、いろんな思いがあつたのでしょう。訴えるような怯えた目でお母さんを見つめ、「あれだけ言ったのに、お母さんの言うことを聞かない、悪い子は車から降りなさい。」と男の子の側のドアを乱暴に開けるお母さんに、「やだー、降りないー、やだー。」と叫び、車から降りない、お母さんから離れたくない、と言って、泣きながら、車のドアにしがみついていたのです。

その時、男の子の白い毛糸の、可愛いチョッキの胸に、男の子の小さな鼻から、鮮やかな赤い血が、ぱらぱらとこぼれ落ちて、光るのが、お母さんの目に映りました。お母さんは、ハツとして、瞬時に頭の中が、真っ白になるのを感じ、そこからの記憶が途絶えてしまいました。そのあと、どんな気持ちで、男の子と話したのか、どう対応したのか、今のお母さんは思い出せません。でも、家に帰った後のことは、これははっきりと思い出すことができました。

くエプロン 3

お母さんは、エプロンをして、さっきの出来ごとを胸に重く抱えながら、夕方の台所に立っています。そこには朝、出掛ける前に男の子と朝食をとったテーブルに、楽しい会話のコマが浮かび、そして、洗面台の脇のワゴンには、男の子の小さなハブラシと、口をすすぐコップが、少し乱雑に置かれています。

夕食に何を作るかも考えられない、心の乱れたお母さんは、それらを目の前になると、突然、溢れる悲しさ、後悔を抑えきれず、そのまま床に膝をついて、エプロンで顔を覆い、大きな声で、「おおい、おおい」と泣き出してしまいました。

お母さんは悲しかったのです。世間向きの顔を作るのに精一杯で、男の子に自分の考えを押しつけていること、自分を守るために、男の子の無邪気な心を犠牲にしてしまっていること、それを分っていることを……。

そして、さっきのあの光景が心に焼き付いて、離れなかったのです。

すると、玄関の外に置き去りにした男の子の、タタタタタという、足早な足音が駆け寄って来ました。お母さんは咄嗟に、男の子に、泣いているところを見られてはいけない！と思いました。それは、幼い子を守る親は強く、信頼出来る人でなければならず、弱い姿を見せることは、子供を不安定にする善くないことだと思ったからです。

お母さんは、エプロンを顔から離し、泣き止もうとしました。でも、傍に駆け寄って来て、心配そうに、お母さんの顔を覗き込む男の子が目飛び込んだ瞬間、大粒の涙と子供みみたいな泣き声を、止められなくなってしまうました。

すると男の子は、点々と乾いた血の痕の着いた、白い毛糸のチョッキの、短い裾を、小さな両手でめくって、精一杯の背伸びをして、両膝をついて、無防備に泣き出したお母さんの涙を、黙ってそっと拭きました。

お母さんは、こんな小さな男の子が、そんなことをしてくれること、さっきの、怖いお母さんへの恐怖を越えて、無心に駆け寄り、こんな思いやりを示すことに、とても驚き、そして自分の情けなさを感じて、思わず、男の子をおもちゃのように抱きしめました。そして、また、「おおい、おおい」と声を上げて、泣き出してしまいました。

年をとったお母さんの体に、その時の男の子の、小さな体と温もりが、はっきりとよみがえりました。

お母さんは、皺の寄った両手で顔を覆い、肩を震わせました。

思い出の中で 4

カセットテープから、「今度、どれ読んであげようか。でも、たくさん読むと疲れるよ」と、おませな口ぶりの男の子の声が続きます。そして、あの頃使っていた、広いベッドに、二人で横になって、そろそろ眠りたくなってきているお母さんが、今度は男の子にせがまれて、長いお話を読み始めました。二人とも、交代にあくびをしているようです。

お話の先を覚えている男の子は、横から、「そしてね」と、口を挟みます。お母さんは静かになります。すると、男の子が、「お母さん！」と、声をかけます。「あ、寝てしまった」とお母さんは言って、話を続けます。

あの頃、そうした時間を、楽しく持ちたいと言う思いと、もう早く切り上げて、眠りたい、と言う思いが混ざり合っていたことを思い出します。

カセットテープから、「もう寝よう。明日起きるの、眠いようってなってしまうよ。お母さん、お仕事だし。そうだ！ 明日はお弁当なし！ おやつ食べたら、帰れるよ」と、お母さんが、男の子に話しかけています。男の子も、半日で帰れることが嬉しそうです。

お父さんと暮らしていない生活だったけれど、お母さんは男の子に、他の子供と同じように、楽しくどこかへお出掛けしたり、遊んでやったりして、休みの日を一緒に過ごしてあげたい、楽しい思い出をたくさん作ってやりたいと、いつも思っていました。

もちろん、お休みの日でも、忙しい用事や家事もあつたけれど、当然のこと、お母さんと男の子はいつも一緒でした。

ある、桜が美しく咲き誇っていた温かい日のこと。

若いお母さんと男の子は、広い公園の桜山に、お花見に出掛けて行きました。

その頃のお母さんは、お父さんと遠く離れた土地に引越したばかりで、友達もなく、淋しい気持ちを、しつかり生きていくぞ！という気持ちで隠しているようなところがありました。

男の子は無邪気に、賑やかなお花見の人々の波や、ブランコなどの遊具に、活気づいていました。一方、お母さんの方は、公園のあちこちの家族づれの中に、男の子位の子供を連れ、た若い夫婦や、おじいさん、おばあさんに、あやされている子供の姿などばかりが目に入り、母子の、二人きりの姿が、自分のかけがえのない男の子を、小さく、場違いな存在に思わせて仕方なく、居心地の悪さを痛烈に感じていました。

満開の桜は、辺り一面に、薄桃色の花びらを散らし、ちぎり絵のように、黒い地面を覆っていきます。

男の子は、小さな雀のように小走りし、軽い足取りで、あちこちに興味を注いで、楽しげに弾んでいます。

それはお母さんの心に、寂しく映り、いたたまれなさに、息が詰まるようでした。男の子

は、無邪気に楽しんでいたのでしように。

二話 思い出の後で 1

そうでした。カセットテープを聴きながらお母さんは気付きました。いつも、何時の日も、男の子は天使だった、と。

忙しく暮した日々の中で、あの子は、お母さんの好きな野の花を摘み、秋の野草で種だらけになって、息をはずませ帰って来た。私が、喜んで花を受け取ると、服に刺さった種が、ちくちくして痛い、思い出したように半ペソをかいていた。その時私は、こんなに種をつけてきて、取るのが大変と、あの子に不機嫌な顔をした。種

不機嫌にしている私に、あの子は、保育園で習った歌を、覚えている限り、おどけながら歌って、笑わせてくれた。種

笑いながらも、歌詞の間違いを指摘していた私だった。でもあの子は歌い続けた。そう、喜ばせ続けてくれたんだね。

「僕がお母さんを守ってあげる！」と、いつも言ってくれた。種。そんなあの子が、ヒーローショーで、悪者がステージから飛び降りて向かって来たら、怯えて、「お母さん、お母さん！」と、繰り返し、私の腕にしがみついた。

でも、あなたは私の涙を、血の付いた自分の服で、拭いに駆けつけてくれる子だったんだ。すべてを、お母さんを喜ばせることに、お母さんが、振り向いてくれるかどうか、かけていたあなただったんだ……。

私の、一生分の喜びを与えてくれた、あなただったんだ。

思い出の後で 2

テープの中で、男の子の、かすかなあくびの音が洩れ、若いお母さんは、どうやら本を置き、自分もあくびをしながら、今度は、古い子守唄を小声で歌い出しました。布団の上から、男の子の体をゆっくり歌に合わせて、叩いています。三番まで歌うと、また何回か繰り返し、今度は別の子守唄を歌っています。

どうも、睡魔に襲われているらしく、歌詞もメロディも、怪しくなってきました。少しすると静かになり、カセットテープの雑音が、主な音にとって代わりました。録音していることも、きつと忘れて、眠ってしまったのでしょうか。

テープを聴いていたお母さんは、スイッチを止める気持ちになれませんでした。慌ただしく、忙しく過ぎた一日が終わり、眠りについた母子二人。二人が作り出す、日常の音は消えました。まるで、役者の去った舞台のような静けさ、そして余韻、寂しさです。でも、去り難い気分です。古いカセットテープの雑音を聴きながら、お母さんは思いました。

昔、子育ても、自分の生き方も不安で、これで良いのか、こんな私が、こんな気持ちで、

子供を育てて良いのか、などと悩んでいたこと。

そんな時、「子供は、親を守るために、生まれてくるんですって。あなたを見て、あなたを選んで生まれてくるんですって。子供は天使よ」親に仕返しをするような生き方をする子もいるけど、「それは、そういうふうに関がしてしまうのよ、子供を信じなきゃ、あなたを助けにきたんだから」と言った人がいた。

そうだった。今思えば、あの子はいつも若い私に、何かを気付かせ、私自身を見詰めさせてくれた。そして何時の日も、私を喜ばせるために、小さな体に、情熱を燃やし、温かい心ではほ笑みと、愛のサインを送っていてくれたのだ。

忙しく過ぎた、私の人生だったが、私はあの子に、何を与えてきたのだろうか。どんなサインをあの子に送り、あの子はそれを、喜んで受け取ったのだろうか。

何の駆け引きもなく、真っ直ぐに親を見詰めていた子供の日々は、それだけで、親に素晴らしい贈り物を、無償で与えてくれた。それに親が気付くにしても、気付かないにしても。

でも、もし気付いて、大切に、貴重な贈り物だと感じ、子供を抱きしめたなら、きつと未来に繋がる宝物になるだろう。

あの、ふくよかな、すべすべした肌、拙い言葉を語る小さく、潤った口唇、あどけなく動く目。存在全てが、此の世で、人生の意味を模索する、荒波の中に生きる大人達へ、神様の恵みを届ける、天使の日々なのだ、きつと。

人は天使で生まれ、子供時代に一生分の奉仕をし、修羅をくぐって、天に帰り、修羅と共に、生きるためにまた生まれてくる。そんな思いが、年老いたお母さんの胸に、こみ上げてきました。

思い出の終わり

雑音の中から、男の子のものか、お母さんのものか、かすかな躰が聞こえてきました。カセットテープの中の二人には、あずかりしらぬこと。

それを何年も経って聴いているお母さんは、涙を拭いながら、吹き出してしまいました。とても愛おしく、とても哀しく思えたのです。

そして、もしかしたら、神様も、こうした眼差しで、人間の営みに、目を向けていらつしやるのではないかしら、と。